



## 「こころの宝箱」

永井 悦子 著

評 / 大村 信蔵 (マガジン編集長)

**こ**この本は子育てのHOW TO本というよりも、教師の資質を持った一人の女性のエッセイとして読んでもらおうと、いいかなと思います。

**と**ても平易な文章で「あっ」という間に読めます。また、特別な環境に置かれた生活も、一人の女性がその場、その場に対応していく様子が私には手に取るようにわかりました。人それぞれ、対応の仕方が異なるなあと思いながら、「神様は耐えられない試練を与えない」とも思わされました。この本を読まれる方で、「私には無理」と思われる箇所が出てくるかもしれませんが、一人の女性が母親になっていく姿が見えてくると思います。

自分が一人の女性からどのような母親になっていきたいかを考える時を与えてくれるのではないのでしょうか。

**い**ろいろな子育ての本を読むと、必ず出てくるキーワードがあります。それは「時間を共有する」ということです。子どもと遊んだり、絵本の読み聞かせをしたりする時間を確保しようとすると、同じことの繰り返し、同じ遊びに付き合わされることもあったり、1冊読んだからおしまい、とはいかないことがあります。「もう一度読んで」とか、他の本を「読んで」とか、親からすると結構苦痛です。親の腹決めが必要です。著者も固い決心をして行動したことが書かれています。子どもが大人へと成長する過程で、子どもは親の愛を確認する行動をとります。そのことがこの本にも書かれており、自分も子どもに試されたことがあったなあと思いました。まさしく、本書にも書かれていますが「育児」は「育自」だなと思いました。ぶっつけ本番の子育てを通して、お父さんもお母さんも子どもと一緒に成長できるいいですね。私も子育てを通して、様々な葛藤を経験して、子どもに成長させてもらってきたことを思い返しました。

**「母語」**という言葉が本書には出てきます。これは教育者ならではの視点だなと思いました。

子どもにことばの世界を広げてあげることはその後の別の言語習得にも関係してくることが書いてありました。

まずは、その子どもにとって土台となることばを豊かにしてあげることで、そこを土台にして他の言語や学習の世界が広がるのです。それには親子のコミュニケーションが大切です。この事はかなり昔から言われてきたことでもありますが、著者の経験からも確かだと納得できます。

**ま**た、一般的な幼児教育ということではなく、幼児の時からいろいろな事に触れる大切さも書かれています。目に見える結果がすぐに出ないからということで、やっても無駄だ、というようなことはない。子どもはきちんと感じて学んでいる。そう書かれた著者の実体験は、子育てになかなか結果が出ないからこそ悩んでしまう親の励ましになると思います。

**ど**のような子育てでも、楽しんで、希望を持ってしていくときに、やがて親も子どももステキな宝ものを箱の中に見いだすことになると思います。

**他**にも紹介したいことはたくさんありますが、まずは気軽に手にとって読んでいただきたいと思います。



「こころの宝箱」  
永井悦子著  
B6判 164頁  
定価 1450円 (+税)  
ギャラクシーブックス

\* FFJ では取り扱っておりません